## 「相手の立場になる～自分が見えてくる」

### ●「お～、いたい、いたい」

「ほとけさま」という言葉には、やさしく、あったかく、いつくしみふかいお方という印象があります。そのイメージは、「ほとけさま」の開かれたおさとりにあるようです。
「さとり」は、智慧といわれます。今まで見えなかった迷いや自己中心の煩悩を気づかせて、照らしだし、進むべきまことの方向を示す、きびしさ、するどさ、明晰さがあります。
「さとり」はまた、慈悲といわれます。邪見(じゃけん)や驕慢(きょうまん)の心にとどまり、居直ったり、思い上がる私を包み込み、まことのいのちに育てる、優しさ、潤いがあります。
　この慈悲が、もっとも具体的な深い行動となった姿を同事(どうじ)ともいいます。これは、相手と同じいのち、同じ立場になって、事(こと)に向き合っている姿といえると思います。
　そういえば、お医者様が子どもの腕に注射の針を刺そうとした瞬間、「いたい!!」と大きな声で、思わず叫んだのは、その子を抱いていたお母さんだったという話を聞きました(雪山隆弘住職『お茶の間説法』百華苑)。自分は痛くないはずなのに、子どもの痛みが、自分の痛みとして感じられるのですね。同事ともいわれる、深い慈悲の温かさは、懐かしいような、やるせないような気持ちが私に生まれます。お母さんは、お医者さんの立場でなく、わが子の立場になっているのでしょうね。

### ●あるお医者さん

　愛媛県に生まれ、広島で被爆、それを契機に医師になった岩村昇さん(1927～2005)はネパールで1962年から18年間、貧しい人の医療に献身します。ところが、村人から多くのことを学びます。
　巡回先の村で重症結核患者を診療所に運ばなければ治療ができないで困っていた時、通りがかりの青年が背負い三日三晩歩いて運んでくれました。ボロボロのシャツに裸足の青年はお金のためじゃないと言って謝礼を受けとりません。じゃどういう気持ちで運んでくれたのと聞くと、「サンガイ･ジウネ･コラギ(生きるとは共に助け合い分かち合うことだ)、だって僕は若い、この婆ちゃんに人生のたった三日を分けただけだ」と去っていきました。死んでも忘れられないと感動の思い出を語っています(岩村昇『みんなで生きるために』朝日新聞、1993年9月より)。
　学校で福祉を学んだことも(ひ)ない青年の言葉「サンガイ・ジウネ・コラギ」(Living is Sharing)」が、岩村さんの一生を決定づけたのです。その後、現地で孤児12人を養子として育て、帰国後、アジアの人々のため様々な協会、NGOを立ち上げ、2001年にはネパールに岩村記念病院が建てられました。
　この出来事を通して、私は、改めて自分の生き方を見つめ、また、導かれる思いです。
　それは、相手の立場を尊重するようなあり方に出遇うと、お恥ずかしいな、ありがたいことだなという深い生き方を知らされることだと思いました。

### ●どの立場に立っているか

　浄土真宗の生活信条では、「互いに敬い助け合」う生き方が示されます。それは、それぞれの存在と平等を大切にする世界を開く如来さまの願いが根本に伺えます。しかし、世の中には、このようなことを、人々に、明らかにし、そして気づかせてくれる念仏が世に広まることを嫌がり恐れる立場が一方にあります。
　それは誰かと言えば、法然聖人や親鸞聖人を流罪にし、そのお仲間を死罪にした当時の宗教的権威と世俗的権力です。
　どういう立場に立つかで、同じ出来事、同じ情報もまるで違って見えてくると、同朋大学学長だった尾畑文正先生は『親鸞聖人の手紙から』(「真実に背くもの」東本願寺出版、82頁)で明らかに示してくれています。

> 「上から目線で読むのか、下から目線で読むのか。国家を立場とするのか、民衆を立場とするのか。その立場が問われているのでしょう。」

　尾畑先生は、財産を集める権力も上下関係の支配を誇る権威も、念仏を申す私と無関係ではないと親鸞さまは教えてくださるというのです。

　かつて関東から京都に帰られた親鸞聖人に対して様々な情報がもたらされました。信頼する性信房、あるいは実子慈信房善鸞などからです。その中で親鸞聖人もそれらの情報の歪みに気づきます。気づかせたものは、関東のご門徒に対する深い信頼とその立ち位置です。

> 　親鸞聖人に「いし･かわら･つぶてのごとくなるわれらなり」(『唯信抄文意』『註釈版聖典』七〇八頁)という言葉があります。
> 　それは、「石･瓦･礫」のように、無益なものとして見捨てられ、踏みつけられていた人々、つまり、民衆に立つ親鸞聖人の生きざまを表しています。
> 　だから、お手紙の中の「獅子(しし)の身中(しんちゅう)の虫の獅子をくらふがごとし」(『親鸞聖人御消息』第二十八通、浄土真宗聖典註釈版七九一頁)」ということも、関東の大地で念仏申されている人々の中に、念仏の教えに背く人々がいて、それらの人々が念仏の共同体を混乱させているということではありません。
> 　むしろ、その混乱の正体を「領家(りょうけ)･地頭(じとう)･名主(みょうしゅ)のひがごとすればとて、百姓をまどはすことは候はぬぞかし。仏法をばやぶるひとなし。仏法者のやぶるにたとへたるには、『獅子の身中の虫の獅子をくらふがごとし』とそうらえば、念仏者をば仏法者のやぶりさまたげ候ふなり。よくよくこころえたまふべし」と明確にいわれるのです。
> 　このお手紙の解釈は、従来は念仏者の中に念仏をやぶるものがいると読まれてきました。しかし、故河田光夫氏は、そうではなくて、『念仏者と仏法者が対立しているんでしょう。念仏者を仏法者が「やぶりさまたげそふらふなり」と言うている。つまり、この仏法者とは念仏者を弾圧する仏法者。つまり、旧仏教をさしている』(河田光夫『親鸞聖人からの手紙を読み解く』明石書店)と明らかにしました。
>
> **本多私訳)**第二十八通の該当部分のみ。それぞれの荘園の所有者や幕府の役人たち、名主たちが間違ったことをするからといって、農民たちが動揺することは決してないのです。
> 仏法を破る人はいません。仏法者が、仏法を破る喩えとしてあるのは、「獅子の身体の中の虫が、獅子を食らうが如し」といいますから、念仏者を仏法者(旧来の仏教者)が破り、妨げるのです。十分にご理解ください。

　ところで、この権威や権力という立場を、自分とは別のことであり、人ごとと受けとめやすいものだということをこのお手紙を通して、親鸞聖人は、注意してくださっていると尾畑先生はおっしゃるのです。

> 　それらの権威と権力はこの私と無関係に存在するものではありません。
> 　むしろそれら(権威と権力)は、(阿弥陀さまのご)本願の真実を見ようとも(つまり、そのお慈悲を受けとめようとも)しないで、人を踏みつけてでも自我の欲望の満足を願ってやまない私そのものの外在化された(外に表れた)姿です。
> 　何も外側の権力と権威だけが問題なのではないのです。
> 　それらを支え、それらを頼んで生きている私自身の問題としても、「獅子の身中の虫」もまた、あらためて問わねばならないでしょう。

　仏さまの教えは、相手の立場に立つことを教えてくれています。しかし、それは同時に、気づかぬうちに、相手の立場に立てず、思い上がっている私自身のなっていない姿を教えてくださっているものでもあります。
　親鸞聖人のお手紙には、そうした権力や権威を気づかず心の奥底で支え、それらを頼んで生きていこうとしている私自身の問題として、「獅子の身中の虫」を問いにしてくださいます。
　親鸞さまは、「石や瓦や小石のような私たち自身のことだ」と、民衆の側に立つ生き方、立場から人びとを敬い、心を寄せながら、同時に自分を深く見つめることを教えてくださっているのだと私は浄土真宗の教えを学ぶようになりました。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったあなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で『親鸞様･御和讃』を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で『親鸞様･御手紙』を学びにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料･茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。